

変化し続けるから面白い！

天神祭にみる「大阪らしさ」とは

毎年一三〇万人もの見物客が訪れる天神祭。

大阪の夏を彩るこの祭りには、実は「大阪らしさ」が満載なんだとか。

天神祭研究の第一人者である高島幸次さんに

「大阪らしさ」が生み出す祭りの醍醐味を聞いた。

大阪天満宮文化研究所員

高島幸次

●たかしま・こうじ 1949年大阪府生まれ。大阪大学招聘教授。専門は日本近世史専攻。著書に『上方落語史観』（140B）、『奇想天外だから史実—天神伝承を読み解く』（大阪大学出版会）などがある。

三重構造のバランスがいいお祭り

——ズバリ、天神祭とはどんなお祭りをかを一言で言うのと？

年に一度だけ、大阪天満宮の神様が氏地を巡幸されることに、氏子さんたちが感謝する祭りです。

一般にどこの神様も、年に一度は、神社周辺に広がる氏地の平安や、氏

子たちの無事を見回られます。すると、氏子たちは、日ごろは自分たちが神社に足を運んで拝まねばならないのに、この日だけは、神様のほうからお出ましになるわけですから、そのご案内をしましょう、お供をしましょうということとぎまで渡御列をつくれます。行列に参加する氏子たちは、この巡幸を喜ぶ気持ちから、古式ゆかしい装束や、笛や太鼓で賑やかに

したり、いろいろなかたちで神様への感謝の気持ちを表現する。お祭りって、そういう日なんです。お祭りの中心には、まず神職が神社で行う「神事」があります。その周辺には氏子さんたちによる渡御列が位置し、これを「神賑行事しんしん」といえます。喜びの気持ちを表す行事ですね。天神祭のように神賑行事の規模が大きいと、見ごたえがあります

ので、よそからの見物客も増えてきます。それが「観光行事」です。

全国のお祭りは、神事と神賑行事と観光行事という三重構造で分析できると、僕は考えています。ある地域では神事と神賑行事だけの祭りもありますし、限界集落などでは神事だけの祭りもあります。町おこしなどの場合は、神賑行事にあたるイベントと観光行事だけの、神事がないお祭りもみられます。その意味では、天神祭は三重構造のバランスが非常によく取れています。

——お祭りは普通、天神祭のように夏場にすることが多いんですか？

年に一回、どこの神様も見回りに出はるって言いましてけれど、神様はそれぞれどのタイミングで巡幸しようかと考えてはります。で、町の神様は、一年の半分が過ぎたころに、氏子が暑さで疲れてないか、食べ物

が腐りやすいけど食中毒にかかってないか、悪い疫病が流行りやすくなってるけど大丈夫か、などと気にかけてくれるんです。昔の町はいまと違って衛生的な環境が整っていなかったから、夏ってやっぱり怖いんです。それで、町の神様はそのころに出て来はります。その一方、農村では農業の豊凶が最大の関心事ですから、神様も一年の収穫が終わったころに「ご苦労様でしたね」とねぎらいに出て来はる。だから、町は夏祭り、村は秋祭りということです。

——天神祭の渡御行列は、天満宮の周辺を陸渡御した後に、大川の船渡御に移りますが、船渡御は珍しいのではありません？

多くの神社は、氏地の中心部に鎮座していますから、神様は神社の周辺を陸渡御されます。

けれども大阪天満宮は、ちょっと違う。大阪天満宮の氏地は、大川の上流から流れついた砂によって下流が陸地化していくにしたがい、どんどん伸びていきました。つまり、西方へ細長く伸びた氏地の東端に天満宮は位置するんです。そのために陸渡御の途中で、神様が「細長く広がりにすぎて、見回るのがしんどい」って言いだしはる。そんなこともあって、船に乗ってもらえます。

——それ、神輿を担ぐ人間のほうがしんどいからと、ちゃうんですか？
そういうことを考えるのは、信心が浅い証拠です。

人々を楽しませる仕掛けたち

——天神祭の前日に銚はこみ流神事が行われますけど、どうして銚を流すんですか？